

星ふる高原

菊池光治

自分の好きな絵本を数冊、わきにかかえて街を歩くのが、今の女子大生のちょっとした流行なのだそうだ。夏の軽井沢もまた、若い女性で占領されるようになった。

☆

絵本と軽井沢。どちらも私が最も愛すべき存在だった。『絵本のような街』これが、私が持っている軽井沢へのイメージなのだが、最近そんな軽井沢を訪れたのは、草津白根にスキーに行った帰り、まだ雪が降ってきそうな初春のことだった。妻の美枝子と、近所の小学校四年生の祐之君、それに祐之君のママがいっしょだった。白糸の滝からの山道を三笠に抜け、泥まみれになった車でゆっくり街を一周してみた。さすがに人影はまばらだった。いつもなら五、六月頃までは静寂に包み込まれるこの街も、最近のブームのため、四月の下旬からもうにぎわいだし、そのためか、こんな初春か

敵冬にしかその素顔を見せてはくれなくなっていた。

若い連中で埋めつくされるテラスのある喫茶店の隣には、馬が数頭つながれて、ひなたぼっこをしている。道を横にそれて裏道に入れば、テニスコートにつながる道の樹々は葉を落として風に震えている。夏になればこの殺風景な道を、色とりどりの服が埋め、楽しそうな笑い声やかけ声が向こうから聞こえてくるのだろうか。今は人の声ひとつなく、吹く風はそのまま人の心の中にまで入ってくるようだった。

急に熱いコーヒーが飲みたくなった。祐之君は何がいいかと後ろをふり向くと、はじめてスキーをはいて、それでいて素質があるのか二日目には平気な顔をして白根から草津まで三・八キロのダウンヒルを一気に滑りおりました彼は、もうくたくたとばかりねむっていた。

起こさないように、ゆっくりと車を旧軽のホテルの前につ

ける。さすがにこども、訪れる人は少ないとみえて、張り出したテラスのまわりには木の枝が打ちつけられていた。

ロビーを通り抜けて、案内されたカフェテラスは、夏のあいだ使われている場所とは反対側の、ずっと奥まったところにある部屋だった。大きな椅子にどっしりと腰をおろすと、私も少し疲れを感じはじめた。

ママと、「ほんとうにお疲れさまでした」などと言い合っているうちに、美枝子と、急に元氣を取り戻した祐之君は、隣にあるゲームコーナーに行ってしまった。やがて運ばれてきた熱いコーヒーをひと口飲んで、煙草に火をつけるころ、おもてには夕暮れが迫っているはずだった。私にとつての静かな時間が、落ちついた木調家具とインテリアからなる空間を流れていった。軽井沢がもっとブームになって、もっと観光客が増えつづけたなら、やがてはこの空間も、近代的なホテルの一部に組み換えられてしまうのだろう。そう考えて、ふと一冊の絵本が頭の中に浮かんだ。花の咲く丘に建てられた小さな家のまわりに、ある日一本の道ができる。たくさん車がやってきて、やがてその道は立派な舗装路となり、どこからともなく集まった人々によって街がつくられる。鉄道の高架線の下敷きとなって苦しくゆがむ小さな家は、さいご

にやっともとのような場所に移してもらって息をふき返す、という内容だったが、美しい田園の中に建てられた小さな家を、時の流れの中に塗り込めていったこの絵本には、永久不変の真理が横たわっているように思えた。

二本目の煙草をつけようとするころ、祐之君がもどってきた。見ると手に皮の袋を握りしめている。聞けば、ゲームでコインを三十枚も当てたという。いつもテレビとお友達という彼らの世代がおとなになるころ、この街はどうなっているのだろうか。三・八キロのダウンヒルに挑戦し、果てはコイン三十枚を獲得したヒーローを車の後席にお乗せして、あかりのともったホテルをあとにした。車は踏切を越えて、バイパスを走り、やがて碓氷峠にさしかかっていた。遠くに星がまたたきはじめている。もう軽井沢の上界は、数えきれないほどの星に埋めつくされているのだろう。

☆

流行が去ってなお、軽井沢は美しいだろうと思った。流行が去ってなお、絵本は真理に一步近づくだらうと思った。どちらとも私はずっとつきあえるような気がしていた。

(絵本店経営)